

# 19 世紀中葉の中国における社会変容と民族・宗教 — 太平天国運動を中心に

研究代表者 国際基督教大学教養学部・教授 菊池秀明

## 1 研究の目的と方法

近年日中関係が悪化する中、中国社会の特質を冷静に把握する必要が高まっている。本研究は 19 世紀中葉の宗教・社会運動である太平天国運動（1850 年～1864 年）を取りあげ、中国社会の流動性の高さ、民族と地域の多様性および差異について分析を試みた。

この運動の主な担い手は客家（客家語を話す漢族のサブグループ）と呼ばれる辺境の下層移民であった。また運動が発生した要因の一つに、移民間の政治的リーダーシップをめぐる争いや漢族、少数民族間の利害対立があった。さらに南京に首都を構えた太平天国の政治的主張は復古主義的色彩の強いものであったが、揚子江下流域の豊かな住民は彼らの主張に反発した。つまりこの運動を研究することは、民族紛争や都市と農村の格差など、現在の中国社会を理解するうえで不可欠な問題を解明することにつながると期待される。

本研究のもう一つの目的は太平天国の宗教的特質に関する研究である。太平天国の創設者である洪秀全は下層知識人の出身で、彼が設立した上帝教はキリスト教と儒教の影響を強く受けた。とくに『旧約聖書』の偶像崇拜批判に影響された彼はユダヤ・キリスト教思想の「不寛容（Intolerance）」を受容し、排他的かつ攻撃的な教義を生み出した。この一神教の非妥協的性格の伝播に関する分析は、現代なお宗教的対立がやまない世界を理解するうえで大きな示唆を与えると考えられる。

なお現在の中国では、政府の法輪功弾圧や都市知識人による農村蔑視を背景として、辺境の下層民が生んだ宗教運動である太平天国をカルト宗教（邪教）として否定的に捉える見解がある。しかし近現代中国において大きな影響を与えたマルクス主義も、その救済論的側面や敵に対する容赦ない迫害という点でユダヤ・キリスト教思想の不寛容を受けついでいた。太平天国の宗教的特質を研究することは、中国共産党、国民党がその内部に抱えていた抑圧的な体質を再検討するきっかけになると予想される。

本研究は代表者が中国、台湾、イギリスで収集した<sup>とうあん</sup>檔案史料（日本の公文書に相当）と族譜、筆記史料、地方志の整理、分析を基礎として進めた。また 1850 年に蜂起した太平天国の足跡を跡づけながら、(a) 進撃先における移民の存在形態と太平軍への参加状況、(b) 民族関係とくに太平天国の「滅満興漢」主義と漢族・満洲族間の関係、(c) 太平天国の政策に対する揚子江流域の住民および外国人宣教師の反応という 3 つの視点から分析を進めた。これらの作業を通じて、現在なお不明な部分が多いこの運動の実像に迫るように努めた。

## 2 研究成果

本研究は7月、8月、11月に史料収集のための海外調査を行い、400件を超える新史料を収集して分析した<sup>1</sup>。その結果をもとに太平天国前期の歴史すなわち1847年に上帝会が偶像破壊運動を始めてから、1853年3月に太平軍が南京を占領するまでの経緯を10本の論文という形で詳細に跡づけた<sup>2</sup>。いまその内容を要約的に示せば以下のようなになる。

### 第一章、広西における太平天国の蜂起（1847年～1852年）

#### (a) 広西における上帝会の発展と金田団營<sup>3</sup>

1847年に紫荊山で上帝会の成功を知った洪秀全は、10月に偶像破壊運動を開始した。その背景には彼の『旧約聖書』に偏った聖書理解があり、彼はユダヤ・キリスト教思想の不寛容や儒教的正統論の影響を受け、偶像崇拜の否定を神仏の破壊という行動に結びつけた。またこの運動は廟信仰に結集していた有力移民の反発を買い、1848年に王作新は馮雲山（後の南王）を捉えて告発した。結果は王作新が敗訴したが、王作新は社会の変化を敏感に察知した地域リーダーであった<sup>4</sup>。

馮雲山が獄中にいた1848年に楊秀清（後の東王）、蕭朝貴（後の西王）のシャーマニズムである天父、天兄下凡が始まった。彼らの活動は太平天国の歴史において大きな転機となったが、当時は1856年に徐徴が「菩薩の賜諭」<sup>5</sup>を皇帝に提出するなど、エリート、非エリートの区別なく神意を問うという行為が行われていた。また天父、天兄下凡がもたらした変化として、上帝会の宗教結社から政治結社への変質があったが、太平天国期の広東では科挙エリートが抗官事件を起こすケースが多かった<sup>6</sup>。シャーマニズムは地方政府への不満をつのらせていた知識人に清朝支配の正当性について疑問を抱かせ、体制内に止まることの必然性を相対化させたのである。

次に上帝会の武装蜂起にむけての準備と、その過程で発生した様々な政治勢力との対立を取りあげた。後発移民と少数民族、早期移民間の地域紛争である来土械闘<sup>らいどかいとう</sup>については、後発移民の客家がチワン族の耕地を奪取したのは事実だが、客家も成功を収められなかった人々であり、両者の対立は下層民の生き残りをかけた競争であったことを指摘した<sup>7</sup>。また民族対立の中において漢族と

<sup>1</sup> その日程は以下の通り。7月5～11日、中国上海図書館。8月4日～11日、英国 National Archives。11月22日～29日、台湾国立故宫博物院図書館。

<sup>2</sup> 以下で紹介する以外に菊池秀明「英国国立公文書館所蔵の太平天国史料」東北大学文史哲研究会編『集刊東洋学』102号、2009年10月、61～82頁がある。また註記を加えない論文は全て未発表のものである。

<sup>3</sup> 国際基督教大学アジア文化研究所編『アジア文化研究』35号、2009年3月、37頁～63頁所収。

<sup>4</sup> この様子は菊池秀明「金田団營の前夜」『広西移民社会と太平天国』風響社、1998年、449頁および2007年の新発見史料である「始建三聖宮碑記」（1821年立、広西桂平市太平天国起義記念館蔵）に示されている。

<sup>5</sup> 徐徴稟、月摺檔 603000179号、咸豊六年中、国立故宫博物院蔵。これは清軍が太平軍の江南大営攻撃に苦戦していた1856年に、嘉興府通判だった徐徴が夢に現れた菩薩のお告げを根拠として浙江巡撫何桂清の戦略を批判したもの。

<sup>6</sup> 徐広縉等奏、咸豊元年三月初九日、反清項 8946-17号、中国第一歴史檔案館蔵。同奏、咸豊元年七月初二日批、月摺檔 603000147号、国立故宫博物院蔵。

<sup>7</sup> 周之琦奏、道光二十二年六月二十三日『宮中瑯道光朝奏摺』第11輯、764頁、国立故宫博物院蔵。

少数民族が融合した例として海南島の黎族を取りあげ<sup>8</sup>、少数民族の上帝会参加は新しい民族的境界を生み出す過程として捉えることが出来ると結論づけた。



図1 太平天国期の中国南部

続いて上帝会と団練との衝突、天地会反乱との関係を分析し、団營即ち金田村への会員の集結が洪秀全の親族が広西へ到着した1850年7月末以後に段階的に進んだことを確認した。この団營は12月に平南県思旺墟で発生した「迎主の戦い」によって一つの区切りを迎えたが、上帝会員に参加をうながす活動は蜂起後も続いた。また団營時期の上帝会において会員に対する厳しい処罰や干渉が行われ、それが「勇敢に突撃して退くことを知らない」<sup>9</sup>と言われた上帝会軍の戦闘力の高さと不可分の関係にあることを指摘した。それらはユダヤ・キリスト教思想の不寛容がもたらした影響であり、太平天国に排他的かつ抑圧的な性格を刻み込んだと考えられた。

**(b) 金田団營後期の太平天国をめぐる諸問題<sup>10</sup>**

1850年12月から1851年前半における太平天国の活動について検討した。上帝会は蜂起当初か

<sup>8</sup> 盧坤奏、道光十三年十二月初八日・十四年三月初一日、軍機処檔案 66709号・67598号、共に国立故宮博物院蔵。

<sup>9</sup> 同治『潯州府志』卷27、平寇略。

<sup>10</sup> 高知大学史学科編『海南史学』47号、2009年8月、53~78頁。

ら新王朝建設という明確な目標をかかげ、旺盛な戦闘意欲と巧みな戦略を持っていた。清軍がこれに気づいたのは早く、2万人という規模に注目した欽差大臣李星沅は広西反乱軍の中で第一に鎮圧すべき対象として重視した<sup>11</sup>。

太平軍が江口から武宣県東郷に進出すると、李星沅は速やかな反乱軍鎮圧を望んだが、容易に鎮圧出来る相手ではないと知った広西巡撫周天爵<sup>しゅうてんしやく</sup>、広西提督向荣<sup>こうえい</sup>は包圍網を形成し、太平軍を山内に追いこむ持久戦を主張して対立した。この時清軍が敗北を重ねた背景には、諸将の不和に加えて使命を明確にしないまま新欽差大臣の賽尚阿<sup>サイシヤンア</sup>を派遣した清朝中央の曖昧な態度があった。

太平軍が象州に進出した頃、広州満洲副都統の烏蘭泰<sup>ウーランタイ</sup>は清軍の戦いぶりを「烏合の野戦」<sup>12</sup>と批判した。彼は指揮官の命令が徹底されない清軍の実態を踏まえ、兵士の再訓練による軍の改革が不可欠であると訴えた。だが周天爵が烏蘭泰の提案を拒否すると両者は反目し、烏蘭泰は周天爵が象州中坪における清軍の敗北を勝利と偽って報告したと告発した。

清軍が内紛をくりかえしていた間、太平軍は団營に間に合わなかった会員を糾合するため武宣県、象州で活動した。だが清軍の包圍が強化されると塩と食糧の不足に苦しみ、広東信宜県の凌十八軍との合流も実現しなかった。7月に半年間の戦闘で疲労した軍を立て直すべく紫荊山、金田へ戻った太平軍は、向荣と烏蘭泰による前後からの攻撃で新墟付近の山麓地帯に追いつめられた。

このとき紫荊山の拠点を失って動揺する会衆を奮い立たせたのは、洪秀全のリーダーシップであった。彼は勝利への確信に満ちた詔をくり返し発して、人々に具体的な行動の指針を与えた。足並みの揃わない清軍を尻目に包圍網を突破した太平軍は、官村の戦いで向荣の軍を打ち破り、水陸両軍に分かれて永安州に向かった。それは上帝会の活動地域から離れることを意味しており、太平天国は一年余りにおよぶ会衆動員の時期を終えたのである。

### (c) 永安州時代の太平天国をめぐる考察<sup>13</sup>

1851年9月に永安州を陥落させた太平天国は客家居住区であった東部盆地を占領し、安定した地域経営を行って王朝体制の基礎を整えた。その内容は洪秀全と五王とくに東王楊秀清を中心とする宗教的な専制支配であり、人々は忠誠を尽くすことで地上の天国における官職の世襲を約束された。また太平天国はキリスト教の影響を受けつつも、実際の社会建設においては儒教的な色彩を強く帯びていた。その担い手は下層知識人であり、太平天国は出版事業や独自の暦の作成<sup>14</sup>に取り組むなど、中国歴代の農民反乱と比べて知識人の影響が突出していた。

<sup>11</sup> 『李文恭公文集』巻九、粵西軍書、徐仲紳制軍、道光三十年十二月十四日。

<sup>12</sup> 烏蘭泰奏、咸豊元年四月二十七日『清政府鎮圧太平天国檔案史料』1、光明日報出版社、1992年、452頁。

<sup>13</sup> 国際基督教大学アジア文化研究所編『アジア文化研究』36号、2010年3月、63頁～89頁。

<sup>14</sup> 『太平曆書』のことで、これを獲得した賽尚阿は清朝200年の統治で前代未聞のことであると報じた（咸豊二年二月初六日『清政府鎮圧太平天国檔案史料』3、13頁）。

この頃清軍は烏蘭泰（南路軍）と向荣（北路軍）の努力によって、軍の立て直しと包圍網の形成に努めた。むろん将兵の士気の低さや規律の悪さ、敗戦を糊塗する虚偽報告、指揮官の反目といった清軍の問題点は相変わらず存在した<sup>15</sup>。しかし咸豊帝<sup>かんぽうてい</sup>の催促を受けた賽尚阿が永安州の前線に到着し、大砲による攻撃を試みると太平軍は防戦に追われた。そして1852年4月に洪秀全は広東の会衆との合流に見切りをつけ、永安州からの脱出作戦を発動した。この戦いで太平軍は後衛部隊が大きな損害を受けたが、清軍も一軍の将である総兵4名が戦死するという大打撃をこうむった。そして太平軍は東進を予想していた清軍の裏をかき、広西の省都桂林を急襲した<sup>16</sup>。

ところで永安州時代の太平天国は政権の基盤作りをただけでなく、東王楊秀清のイニシアティブを確立し、これに従わない古参会員を肅清した時期でもあった。1851年12月に発生した周錫能の内応未遂事件について検討し、清朝側の史料からは計画の存在を確認出来ないこと、紫荊山の大冲村曾氏などこの時期に太平天国の歴史から姿を消した人々が少なくないことを指摘した。また永安州脱出戦で清軍に捕らえられた洪大全（天徳王）についても、現状に不満を抱いていた下層知識人という視点から分析を加えた。そして洪大全が遠ざけられた理由は太平天国の宗教性とりわけ楊秀清の宗教的権威に対する彼の批判的な言説にあったことを明らかにした。

このように考えると永安州時代の太平天国は、延安時代の中国共産党と多くの類似点を持っていた。とくに指導者層のイデオロギー闘争や反主流派に対する肅清は、あたかも毛沢東の政治的権威を確立した整風運動を彷彿させた。この類似点はマルクス主義を通じて再受容されたユダヤ・キリスト教思想の不寛容がもたらした結果と考えられる。

#### (d) 広東凌十八蜂起とその影響について

ここでは上帝会の一翼を担いながら、太平軍本隊と合流できなかった広東信宜県の凌十八蜂起を分析した。凌十八は一定の経済的基盤をもった客家人であったが、五大姓と呼ばれる有力移民が科挙合格枠を独占したこの地で彼がエリートとして上昇する可能性はなく、成功の方途を出稼ぎに求めた凌十八は広西平南県で上帝会とめぐりあった<sup>17</sup>。両者の対立は「旧囡」「新囡」間の土客械闘として評価するには実力差が大きすぎたが、その故にこそ上帝会の活動は政治的反乱として立ち現れた。凌十八の蜂起は「紳士が逼りて民が反す」にその本質があった<sup>18</sup>。

金田の本隊よりも早く蜂起し、その統制をうけなかった凌十八の反乱軍は、太平軍とは異なる

<sup>15</sup> 姚瑩「十九日進攻報中丞状」、咸豊元年九月二十日『中復堂遺稿』巻3（『太平天国革命時期広西農民起義資料』上冊、広西人民出版社、1979年、207頁）。

<sup>16</sup> 徐広縉致葉名琛的信、咸豊二年三月初二日、F.O.931 1301号、National Archives 蔵。

<sup>17</sup> 逆犯凌十八即才錦等家属清單（咸豊二年）、F.O.931 1310号、National Archives 蔵。

<sup>18</sup> 抄呈信宜懷郷司巡檢陳榮親呈凌十八始末緣由各件、F.O.931 1190B号。抄呈茂名胡令交呈凌十八節略、F.O.931 1190A号、共に National Archives 蔵。

特徴を帯びていた。その第一は女性の活躍であり、大頭目の陳葉氏をはじめ多くの女性頭目が存在し、女館の兵士を率いて戦闘に参加した<sup>19</sup>。また洪秀全ら儒教知識人の影響が及ばなかった凌十八軍では、道士や和尚、裸体の女性など中国民衆反乱の原初的な伝統が色濃く現れた。さらに太平軍と凌十八軍の戦略上の違いとして、天地会系反乱軍との関係があった。天地会に厳しい態度で臨んだ金田の太平軍に対して、凌十八軍は兵力不足を補うために天地会軍との連携を試みたが、かえって彼らの意向に左右されて本隊との合流を果たせなかった。

いっぽう清朝の地方政府とその軍隊も多くの問題を抱えていた。地方長官は反乱発生の報告を喜ばず、彼らの意をくんだ地方官は凌十八が政治的反乱をめざしていると知りながら安撫政策で事態を糊塗しようと試みた。また清軍も戦意を欠き、指揮官の無策もあって犠牲者を増やした。さらに両広総督徐広縉<sup>じょこうしん</sup>と広東巡撫葉名琛<sup>ようめいちん</sup>の功名争いが示すように、多くの清朝官僚にとって反乱軍の平定は昇進の手段でしかなかった。

凌十八の蜂起はこうした苛酷な統治に対する異議申し立てであったが、彼らにも弱点があった。凌十八の敗北後、太平天国は彼らが「堅く耐えることができず、志が定まらなかった」と批判した。実のところ凌十八に欠けていたのは果敢な行動力であり、いち早く蜂起しながら金田村へ向かうことには慎重だった。また彼らは清軍の戦力を過大評価し、天地会軍の協力なしには北進しようとしなかった。さらに凌十八軍が広東に戻った時も、自力で永安州の本隊と合流する可能性は残っていたが、彼らは羅鏡墟で籠城を続け、広西へ向かうチャンスを逸してしまった。

こうして凌十八の蜂起は失敗に終わった。だが 1852 年に作られた清朝政府の告示稿は、豊かな地域である筈の広東で「邪匪」「賊党」となる「游民」が多く、秘密結社や民間宗教に入る者も少なくないと述べている。特に「天兄天父」を唱えた凌十八の上帝会に言及し、彼らが厳しい処罰を受けたことを紹介して、これらの反乱組織に加わることの無益さを訴えた<sup>20</sup>。ここから 1850 年代初めの広東において凌十八蜂起の与えた影響の大きさが窺われる。

## 第二章、太平天国の南京進撃（1852 年～1853 年）

### (a) 太平天国の広西北部、湖南南部における活動について<sup>21</sup>

永安州を脱出した太平軍が桂林を攻撃し、湖南省道州に進出するまでの過程を分析した。太平軍の北進を知って急ぎ桂林に戻った向荣は、広西巡撫鄒鳴鶴<sup>そうめいかく</sup>と防衛戦に取りかかった。だが烏蘭泰の死によって指揮官の不足に悩み、総帥である賽尚阿が陽朔県で模様眺めをしたために士気は上がらなかった。また太平軍も桂林城を完全に包囲する兵力は持ち合わせていなかった。

<sup>19</sup> 審定凌十八案犯清單（咸豐二年）、F.O.931 1347 号、National Archives 蔵。

<sup>20</sup> 為劉諭郷氓勉為良善毋惑邪說各保身家事（咸豐二年）、F.O.931 1370 号、National Archives 蔵。

<sup>21</sup> 国際基督教大学アジア文化研究所編『アジア文化研究』37 号、2011 年 3 月に掲載予定。

また桂林の紳士 龍啓瑞<sup>りゅうけいずい</sup>が取り組んだ団練の結成は単なる治安維持策ではなく、団練局を中心に産業を育成して経済を活性化し、失業問題を解決しようとする地域振興策であった。しかし戦闘経験がなかった団練は太平軍に敗北し、責任者であった鄒鳴鶴は咸豊帝の叱責を受けた。また注目すべきはイスラム教徒が太平軍に参加ないし協力した事実であり、その理由は彼らが太平天国の強い宗教性とくに一神教の教義に基づく偶像崇拜批判を支持したためと考えられた。

桂林攻撃に失敗した太平軍は広西北部の全州を占領したが、通説ではこの時太平軍は南王馮雲山が負傷した報復として住民を虐殺したと言われる。だが新たに発見した太平軍兵士の供述書から、馮雲山が戦死したのは襄衣渡<sup>きいと</sup>の戦いであり、全州で殺されたのは清軍守備隊や団練兵士であったことが明らかになった<sup>22</sup>。また太平軍は彼らを宗教的な仇敵とみなして執拗な攻撃を行ったが、こうした真剣な戦いぶりは当時の中国社会において理解を絶するものだったため、人々は「王が殺された報復に住民を虐殺した」というフィクションを生み出したことを指摘した。

襄衣渡での敗北で船や軍需物資を失った太平軍は、衡州方面への進出が不可能となった。だが彼らは南下して道州を占領し、数千人の参加者を得て新たな発展のチャンスをつかんだ。それを可能としたのは湖南南部における反体制勢力の協力であったが、全州攻防戦で太平軍が見せた不寛容な攻撃性に、地方官や清軍守備隊が恐怖を感じて逃亡したことも幸いしたと考えられる。

つまりこの時期の太平天国はなお強い宗教性を帯びていた。それは曾国藩に代表される儒教知識人の異端的宗教に対する反発を招いたが、宗教的情熱に支えられた真摯さこそは 19 世紀のプロテスタントが海外布教で伝えようとした「真理」であった。敵に対する虐殺を厭わない太平天国の不寛容こそは、ヨーロッパ近代がかかえた負の側面だったのである。

## (b) 太平天国の湖南における進撃と地域社会

1852 年夏に湖南南部で活動していた太平天国を取りあげ、その勢力拡大が可能となった理由を地域社会の変容という視点から考察した。19 世紀前半の湖南で盛んだったのは青蓮教反主流派(金丹道)であったが、彼らと太平天国の関係を考察するうえで焦点となる朱九濤<sup>しゅきゅうとう</sup>問題のキーパーソンは李丹であることを指摘した。また李丹は永安州で太平軍に加わり、郴州<sup>ちんしゅう</sup>の劉代偉らに蜂起を促した形跡が窺われるものの<sup>23</sup>、天地会の首領とされた天徳王は反体制勢力の実態とは別のところで作り出された漢人中心主義の表象であることが明らかになった。

この頃道州に駐屯していた太平軍は軍の再編制と食糧の確保に取り組み、新たに加わった反乱集団から略奪物を没収し、彼らを厳しい統制下に置いた。総兵和春と楚勇の首領江忠源は太平軍を

<sup>22</sup> 周永興供、咸豊二年五月初四日、軍機処檔 084613 号、国立故宮博物院蔵。

<sup>23</sup> 張亮基奏、咸豊二年十二月二十六日『宮中檔咸豊朝奏摺』6、747 頁、国立故宮博物院蔵。

挟み撃ちにしようと試みたが、この作戦は清軍の緩慢な動きのために失敗し、道州を出発した太平軍は湖南南部の要衝である郴州を占領した。また太平軍の快進撃が可能となった要因として、湖広総督程喬采らの統率力不足が挙げられ、人材不足に悩む清朝中央の彼らに対する曖昧な処罰は体制派知識人の憤激を招いた<sup>24</sup>。さらに太平軍の進撃先で様々な勢力が呼応した背景には、太平天国が派遣した工作員の活動があったことを指摘し、その例として湖南、広西省境の東安県で発生した蔣瓊、唐元亨反乱のケースを取りあげた<sup>25</sup>。

湖南における太平天国を考える場合、太平軍の参加者をアヘン販売業者（秘密結社員）とした宮崎市定氏と、農民ととらえた小島晋治氏による太平天国の性質論争が有名である<sup>26</sup>。だが両者の議論は定着農耕民こそがあるべき「良民」像と考える日本人の固定観念（あるいはマルクス主義の公式）に囚われており、中国社会における流動性の高さを前提とした下層移民に対する視座が不足していたと述べた。

そして小島氏が紹介した武岡州の阻米事件、耒陽県の抗糧暴動について、新発見の檔案史料を用いて再検討を行い、その担い手が新興の地域リーダーであったことを明らかにした。また清朝の硬直した統治は彼らを反政府的な行動へと追いやると共に、自らの支配の正統性に疑問符をつけたと結論づけた<sup>27</sup>。これら太平軍に呼応した人々の活動は、地方長官の腐敗を告発した体制派知識人の言説と通じる部分があり、満洲人の統治こそが悪政の原因だと主張する太平天国の檄文は、幅広い人々を糾合する可能性を持っていたと考えられる。

つまり太平天国の湖南南部における活動は、辺境の反乱から全国的運動へと発展しただけに止まらない意味を持っていた。湖南出身の曾國藩が湘軍を結成し、中国社会に構造的な変化をもたらしたのは、太平軍が湖南社会に与えた衝撃の大きさから見て偶然ではなかったのである。

### (c) 太平天国の長沙攻撃をめぐる考察

太平天国が南京へ至る進撃過程で体験した、最も長い攻城戦である長沙攻撃について検討した。1852年9月に西王蕭朝貴の先鋒隊は3000名の兵力で長沙を急襲したが、それは戦闘可能な兵力が1万人程度だった太平軍の戦力を考えれば少ない数とは言えなかった。だが彼らは城内突入のチ

<sup>24</sup> 龔裕奏、咸豊二年五月二十五日『清政府鎮圧太平天国檔案史料』3、552頁。

<sup>25</sup> 程喬采奏、咸豊二年正月二十六日『宮中檔咸豊朝奏摺』4、354頁。駱秉章奏、咸豊三年九月二十五日、同書10、566頁、共に国立故宮博物院蔵。

<sup>26</sup> 宮崎市定「太平天国の性質について」『史林』48巻2号、1965（『宮崎市定全集』16、岩波書店、1993年、75頁）。小島晋治「揚子江中流域における農民の諸闘争と太平天国」「太平天国と農民」大塚史学会編『史潮』93・96・97、1965・1966年（『太平天国革命の歴史と思想』研文出版、1978年、83頁）。

<sup>27</sup> 鄭星木等供、道光二十四年六月二十八日、軍機処奏摺録副、農民運動類、反清項8931-16号。



チャンスを見逃し、蕭朝貴が戦死して奇襲作戦は失敗した<sup>28</sup>。また各地から救援の清軍部隊が集まると、形勢は逆転して先鋒隊は防戦に迫られた。

郴州にいた洪秀全の本隊は 9 月下旬に北上を開始した。それは郴州下流の衡州に駐屯していた賽尚阿の軍が長沙救援に向かうのを待ち、水路で長沙へ向かうチャンスを窺っていたためであった。だが賽尚阿は咸豊帝の命令に反して衡州を動かさず、結果的に本隊は危険な陸路で北上した。本隊が長沙に到達すると、太平軍は長沙城に攻勢をかけたが失敗し、10 月に赴任した湖南巡撫張亮基<sup>ちやうりやうき</sup>が包圍網を形成するなど戦況は清軍の方が優位であった。そこで太平軍はトンネルを掘り進め、3 度にわたり地雷攻撃を試みたが失敗した【図 2 および写真 1・2 参照】。

また攻城部隊にかかる圧力を軽減するべく湘江西岸へ進出した翼王石達開の軍は、向荣の清軍と戦闘を交えた。ここでも清軍は優勢であったが、水陸洲の戦いで太平軍の伏兵攻撃を受けて大敗すると、彼らは戦意を喪失した。また張国樑の壮勇（投降した天地会軍）は略奪に明け暮れ、新任欽差大臣徐広縉の援軍は姿を見せなかった。11 月 30 日に行われた太平軍の長沙撤退は、清軍の厭戦気分を巧みに突いた行動であった。清軍は太平軍の動きを察知出来なかったばかりか、その行き先についても判断を誤り、追撃を振り切った太平軍は岳州で発展のきっかけをつかんだ。

こうして 81 日間に及ぶ太平軍の長沙攻撃は終わった。奇襲作戦に失敗し、水路を用いた本隊の迅速な北上もかなわず、長沙到着後も包圍網に阻まれて新たな参加者を獲得できなかった状況を考えれば、劣勢な兵力にもかかわらず健闘したと見るべきだろう。また太平軍が多く清軍を長沙へ引きつけた結果、湖北への進出が容易になったという側面も見逃せないと思われる。

#### (d) 太平天国の武昌占領とその影響

長沙を撤退した太平軍は、12 月 3 日に益陽県で船を入手して進撃方向を変え、洞庭湖を渡って岳州へ向かった。岳州は陥落し、清朝は湖北提督博勒恭武<sup>ボーランゴンウー</sup>を敵前逃亡の罪で処罰した。だが実際の敗因は湖南の地方長官たちが長沙の防衛を優先する余り、岳州の戦略的重要性を認識しなかったことにあった<sup>29</sup>。2000 名の岳州守備隊では太平軍を防ぐことは出来なかった。

同じことは湖北巡撫常大淳<sup>じやうだいじゆん</sup>が防衛を任された武昌についても当てはまった。武昌の清軍兵力は 5000 名に過ぎず、移動途中の部隊も多かった。新湖北提督雙福<sup>シュワンフー</sup>は全軍を城内に籠城させる作戦を取り、弱腰と非難されたが、太平軍との戦力差を考えれば兵の逃亡を防ぐためのやむを得ない措置であった。だが清軍は住民との信頼関係を構築できず、城外の民家を焼き払って人々の怒りを

<sup>28</sup> 曾水源等稟、太平天国壬子二年八月初九日、F.O.931 1350 号、National Archives 蔵。

<sup>29</sup> 王茂蔭奏、咸豊二年十一月十二日、軍機処檔 087446 号、国立故宫博物院蔵。

招いた<sup>30</sup>。それは厳しい軍規によって民衆の心をつかんだ太平軍との顕著な差異であった。

また通説によると、武昌の清軍守備隊は太平軍の地雷攻撃に怯え、常大淳の吝嗇ゆえに士気が上がらなかったと言われる。だが実際の敗因は太平軍のトンネル工事を防ぐ方法についての認識不足にあった。また雙福が城外の清軍と呼応しなかった訳ではなく、むしろ無理な出撃を諫めたのは向榮であった。そして1月12日の地雷攻撃は清軍の隙をつくものであり、守備隊は組織的な抵抗が出来ず、民間人を含めて多くの犠牲者を出したことが明らかになった<sup>31</sup>。

武昌へ入城した太平軍は敗残兵の掃蕩を行った後、安撫政策を行って初めての都市支配に取り組んだ。その中心は男館、女館の設立と聖庫制度の実施であり、人々は財産を没収され、25人を単位とする太平天国の軍事組織に組み込まれた<sup>32</sup>。その手法は農作業に不慣れな住民たちに重労働を課すなど甚だ強圧的であった。漢口では略奪を行わず、普段通りの商業活動を行わせた太平軍であった——その点では略奪のやまなかった清軍よりははるかにましであった——が、彼らが都市住民を厳しい統制下に置き、収奪したのも事実だったのである。

#### (e) 太平天国の長江進撃と南京攻略

1853年2月に太平軍は水陸両軍に分かれて武昌を出発し、南京へ向かった。その兵力は十数万人で、水路軍は水上陣地やバリケードを擁するなど堂々たる行軍ぶりであった。これに対して向榮の清軍は追撃のスピードが鈍く、補給が追いつかず飢えに苦しんだ。また江西巡撫張芾<sup>ちようはい</sup>、欽差大臣陸建瀛<sup>りくけんえい</sup>の軍は迎撃態勢が整っておらず、小部隊を分散配置したために太平軍の前に壊滅した。江西の重鎮九江は占領され、陸建瀛と張芾は南京、南昌へ後退して咸豊帝の叱責を浴びた。

次に太平軍がめざしたのは安徽省の省都である安慶だった。安徽巡撫蔣文慶<sup>しょうぶんけい</sup>は援軍の派遣を求めたが、救援を命じられた欽差大臣琦善<sup>チーシャン</sup>、直隸提督陳金綬<sup>ちんきんじゆ</sup>は咸豊帝の再三にわたる催促を受けながら出発しなかった。やむなく蔣文慶は数千の兵で太平軍を迎え撃ったが、将兵が四散して1日も持ちこたえられず敗北した。そもそも長江の上流から下流に向かって進撃する太平軍は有利であり、九江の上流で太平軍を防ぎ止める戦略だった清軍には手の打ちようがなかった<sup>33</sup>。

安慶を奪取した太平軍は南京へ向かって進撃を続けたが、その途中清軍の抵抗は殆どなかった。むしろ租税の減免や科挙の実施を約束した太平軍の「偽示」が伝えられると、清朝の地方官や有力者のあいだに中立の態度を取り、明朝につらなる新たな漢人王朝としてその正統性を承認する動き

<sup>30</sup> 廖慶謀等会稟、咸豊二年十二月二十日、軍機処檔 088385 号、国立故宫博物院蔵。

<sup>31</sup> 稟報武昌失陷詳細情形、咸豊二年十二月、F.O.931 1386 号、National Archives 蔵。

<sup>32</sup> 稟報武昌失陷情形、咸豊三年正月、F.O.931 1381 号、National Archives 蔵。

<sup>33</sup> 周天爵奏、咸豊三年二月初四日『清政府鎮圧太平天国檔案史料』5、55 頁。

が広がった<sup>34</sup>。3月初めに太平軍は南京城外へ到達し、陣地を構築して攻城戦の準備を整えた。

南京の清軍が防禦に取り組んだのは1853年1月と遅く、兵力も5000名と不足していた。太平軍の進攻に対する危機感も薄く、籌防局を任された元広西巡撫の鄒鳴鶴を含めて実戦経験は殆どなかった<sup>35</sup>。2月末に陸建瀛が南京へ逃げ戻ると緊張はにわかにも高まったが、防衛の戦略をめぐって陸建瀛と江寧將軍 祥厚<sup>ジャンホウ</sup>、江蘇巡撫楊文定の内紛が表面化した。それは南京の迎撃体制が整っていなかった事実を示しており、3月8日に太平軍の攻撃が始まると、清軍は城外にいた張継庚の壮勇に発砲して多くを誤殺した。また恐怖心から大砲や銃を乱射し、最初の数日で火薬を使い果たした。

太平軍は城北の儀鳳門外で地雷攻撃を準備したが、長沙や武昌の経験に学ばなかった南京の清軍守備隊はトンネル工事の場所を発見出来なかった。3月19日に太平軍の先鋒隊400名は城壁を爆破して外城内へ突入したが、満洲旗兵や壮勇の抵抗にあって一度退却した。この時褒美を得ようと考えた郷勇が城北に殺到すると、防備が手薄となった西南三門から太平軍が攻め込んだ<sup>36</sup>。清軍は総崩れとなり、祥厚は満洲旗兵およびその家族と共に内城に立てこもった。

3月19日から始まった太平軍の南京内城攻撃は、満洲旗兵の激しい抵抗にぶつかった。満洲人女性も防衛および後方支援に加わり、太平軍は多くの戦死者を出した。だが21日に内城は破られて祥厚は戦死した。また満洲人官吏やその家族に対する徹底した殺戮が行われ、生き残った旗人女性を一カ所に集めて虐殺する事件が発生した。その死者は2~3万人にのぼったという<sup>37</sup>。

それでは上記の内容から如何なる議論が可能であろうか。第一に移民の存在形態と太平軍への参加状況について見ると、太平軍が長期間駐屯した広西永安州、湖南省道州、郴州などで下層移民が多数太平軍に加わった事実が確認された。うち永安州は移民の多くが客家で、上帝会は同郷のネットワークを通じて移民たちに参加を促した。また客家の中でも早期に入植し、他のエスニックグループへの帰属意識を持った有力移民は太平軍に抵抗するなど、貧富の差や地域社会における政治的影響力の有無によって太平軍に対する態度が異なることが確認された。

さらに興味深いのは太平軍が進撃先に工作員を派遣し、秘密結社員に対して動員工作を行っていた事実である。林二盛らの供述書【図3参照】はこれを物語る新史料で、太平軍が湖南省長沙を攻撃していた1852年11月に工作員が広東北部の天地会首領を訪ね、長沙へ行って加勢するよう

<sup>34</sup> 海虞学釣翁『粤氛紀事詩』（太平天国歴史博物館編『太平天国史料叢編簡輯』6、中華書局、1961年、378頁）。

<sup>35</sup> 汪士鐸『汪悔翁乙丙日記』巻1（明齋叢刻之一、1936年、上海図書館蔵。また一部は『新版・原典中国近代思想史』第1巻、開国と社会変容、岩波書店、252頁以下に翻訳されている）。

<sup>36</sup> 胡恩燮『患難一家言』上（『太平天国史料叢編簡輯』2、330頁）。

<sup>37</sup> E. G. Fishbourne, *Impressions of China and present revolution: its progress and prospects*(London, 1855), pp.177.

に働きかけた<sup>38</sup>。この時天地会系結社を動員するためのシンボルとして活用されたのが天徳王であり、太平軍には洪大全以外にも何人かの天徳王が存在した。しかし太平天国はアウトロー集団の性格が強い天地会に厳しい統制を加え、その組織を解体して他の部隊へ編入した。また太平軍はモーセの十戒に基づく『天条書』の戒律によってアヘン吸飲を厳しく禁じたため、不満な元天地会員が脱走するなど両者の連合はうまく行かなかった。

次に民族関係とくに太平天国の「滅満興漢」主義と漢族、満洲族間の関係はどうだろうか。本研究は太平天国が進撃途中に引き起こした大規模な殺戮事件を取りあげた。その一つは南京における満洲人の殺害であり、清朝官員、八旗兵とその家族が多数殺されたことが判明した。確かに太平天国は「天下は中国の天下であって、胡虜（満洲人）の天下ではない」<sup>39</sup>とあるように、漢人中心主義に基づいて満洲人の排撃を唱えた。また南京における満洲人虐殺を報じた *North China Herald* は「これはヨーロッパ人に反感を抱かせるが、激情にかられた中国人は報復をやりすぎたとは決して思っていない。彼らの刑罰の方法が極度に残酷なことで知られているからだ」<sup>40</sup>とあるように、漢族の満洲人王朝に対する長年の反感が原因であったと指摘している。

だが実際の事例について見ると、1846年に湖北荊州で旗人と漢族住民の衝突事件が発生<sup>41</sup>したのを除くと、元々満洲族の人口が少ない中国南部では両民族間に深刻な対立関係があった訳ではなかった。それでは太平天国の排満思想はどこから生まれたのであろうか？

太平天国自身の主張に即した場合、彼らが満洲人を排撃したのは上帝会の宗教的な敵である「妖魔」即ち偶像崇拜者と見なしたためであった。またユダヤ・キリスト教思想の伝統において、ヤーヴェは戒めと掟を守らない者には滅びをもたらす裁く神であった。こうした不寛容な教義を受容した上帝会は、その宗教的情熱ゆえに満洲人に対する徹底的な殺戮を行ったと考えられる。加えて上帝教は歴代皇帝が太古の中国で行われていた「上帝」信仰を失わせたと考えており、時の皇帝である咸豊帝を初めとする満洲人を「地獄の災いを招くもの」<sup>42</sup>として一掃しようと試みた。

さらに19世紀の東アジアに目を向けると、太平天国の漢人中心主義はもはや清朝が中華を代表せず、自分たちこそが華夷秩序の中心であると主張した朝鮮、日本、ヴェトナムの「小中華」ナショナリズムと多くの共通点を持っていた。厳しい言論統制が敷かれた清朝統治下の中国では、この種のナショナリズムは地域や方言集団といったローカルな愛国主義（パトリオティズム）の形を取

<sup>38</sup> F.O.931 1149号、National Archives 蔵。

<sup>39</sup> 楊秀清、蕭朝貴「天を戴いて胡を撃つ檄」『頒行詔書』（『新版・原典中国近代思想史』第1巻、開国と社会変容、岩波書店、178頁）。

<sup>40</sup> *North China Herald*、1853年4月23日号。

<sup>41</sup> 裕泰等奏、道光二十六年六月二十一日・八月初六日『宮中檔道光朝奏摺』17、302・641頁。

<sup>42</sup> 洪秀全「原道覺世訓」『新版・原典中国近代思想史』第1巻、開国と社会変容、岩波書店、167頁）。

り、客家などの漢族内のサブ・グループが「自分たちこそは中国文明の正統なる後継者である」と主張する現象を生んだ。また太平天国は「中国」「中国人」という語彙を初めて多用した王朝として知られるが、この時彼らのいう「中国語」とは客家語を指していた。ここからもローカルな愛国主義がナショナリズムの代替物として機能していたことが確認される。

そして太平天国の人々が自分たちの「中華」アイデンティティを確立しようとした時、「夷狄<sup>いてき</sup>」即ち排斥すべき他者として位置づけられたのが満洲人であった。なぜなら外国を「夷狄」と見なした歴代の中国王朝と異なり、キリスト教の影響を受けた太平天国にとってヨーロッパは同じ上帝を崇拝する「洋兄弟」であり、他者とは見なされなかったからである。この太平天国の変則的な「華夷」観念も満洲人に対する激しい排斥感情を生んだ原因と考えられる。つまり太平天国の排満ナショナリズムは現実の民族関係の反映ではなく、太平天国が「天朝」即ち中国とヨーロッパにまたがる幻想の共同体を構想する過程で生まれた人為的な産物であったと言えよう。

第三に太平天国の政策に対する揚子江流域の住民および外国人宣教師の反応についてはどうだろうか。蜂起当初の太平天国が厳格な規律を持ち、進撃途上の農村で人々の支持を集めたことはよく知られている。今回の調査において発見した幾つかの新史料は、いずれもこの説が正しいことを裏付けるものであった。

例えば太平天国が湖北を進撃していた 1852 年に出された雷以誠<sup>らいいかん</sup>の上奏は、太平軍が「もっぱら誘い脅すことに長けており」「食物を買う必要があれば余分に金を払う」とあるように公平な取引で人々を安心させたと報じている。また人々の非難が掠奪や暴行が絶えなかった清軍や義勇軍（とくに潮州勇）に集中し、「人々は兵を仇と見なし、賊に恩を感じるようになった」<sup>43</sup>とあるように太平軍に恩義を感じるようになったと指摘している【図 4 参照】。その原因はやはり太平天国の不寛容な宗教性にあり、掠奪禁止の命令に背いた者に厳しい処罰を行ったためであった。李進富の供述書は毎回の戦闘後、陣地に逃げ戻った上帝会員が二、三十人も殺されたため、「皆が必死で戦うようになった」<sup>44</sup>と述べており、厳罰主義に対する恐怖が中国の農民反乱史上まれに見る高いモラルと戦闘力を生んだことが確認される。

だが 1853 年 1 月に太平軍が長江中流域の大都市である武昌を占領すると、彼らは都市住民の財産を没収して部隊へ編入するという強圧的な政策を開始した。また土地税免除の告示を出して農村の支持を取りつける一方で、都市を孤立させて攻略を容易にするという戦略を採った。それは都市住民に大きな犠牲を強いる政策であり、入隊後の苛酷な待遇に耐えかねて自殺や逃亡を図る住民が

<sup>43</sup> 雷以誠奏、咸豊二年十一月二十九日、軍機処檔 087822 号、国立故宫博物院蔵。

<sup>44</sup> 李進富供、F.O.931 1041 号、National Archives 蔵。

続出した。また太平軍が女性の纏足をやめさせ、彼女たちに戸外で労働するように命じると、人々はこの措置を「暴虐」だと言って激しく反発した。

こうした齟齬が生まれた最大の原因は、現代中国においても深刻な都市と農村の格差であった。太平天国の統治下で2人の娘を失った汪士鐸<sup>おうしたく</sup>は、「水郷（江蘇などの都市をさす）と山郷の人は天と地のようにはっきりと分かれている」と述べたうえで、「山地の人」であった太平軍の将兵は都市住民の習慣や発想を理解できず、苛酷な要求をしてしまった——客家の人々は纏足の習慣を持たないため、纏足した女性の足が元に戻らないことを理解できなかった——と述懐している。彼はまた古代の偉大な君主はみな「性情が中庸」を得ている平原の出身者であり、水郷や山郷からは生まれないと断言して太平天国の滅亡を予測した<sup>45</sup>。

実際のところ太平天国は、主観的には正統な中華王朝を回復しようとしたが、彼らの主張は都市住民に受け容れられなかった。そしてユダヤ・キリスト教思想の不寛容が太平天国に与えた影響とは、客家の屈折した自己主張に正当性を与え、これを強化したことにあった。元々ユダヤ教は抑圧された民の救済論という性格を持っていたため、辺境出身の下層民であった太平軍将兵の羨望と怨嗟を後押しする役割を果たしたと考えられる。この不寛容な情熱に裏打ちされた都市住民に対する収奪をよく示すのは、1853年2月の春節前に武昌で行われた妃選りであった。それまで富と無縁であった太平天国の人々は、全知全能の神のもとで都市の祝祭空間を独占的に享受することにより、失われた歴史を埋め合わせしようと試みたのである。

ところで太平天国の不寛容な宗教的情熱は、同じキリスト教の一派であるカトリックに対しても向けられた。1853年3月に太平軍が南京を占領すると、太平軍将兵がカトリックの教会堂に姿を見せ、キリストの像や祭壇を破壊した。また信者たちに太平天国スタイルの礼拝を行うように強要し、命令に従わない者に迫害を加えた<sup>46</sup>。

ここで「キリストの像」を含む一切の偶像を認めなかったのは、プロテスタントの影響を受けた上帝会ならではの行動であった。1860年7月28日のNorth China Heraldは、太平天国がキリスト教の名を騙った「異端」であるという批判に対して、ヨーロッパにおけるキリスト教の歴史も血なまぐさいものであり、太平軍がかつてのヨーロッパの正統派キリスト教徒と同じように過激な偶像破壊を行っているからと言って、これを非難するのは道理に合わない論じている。

ヨーロッパの宗教戦争を彷彿させるこの事件は、内なる他者に対して強い攻撃性を示したという点でユダヤ・キリスト教思想の不寛容を典型的に示している。また1860年に清朝と北京条約を

<sup>45</sup>汪士鐸『汪梅翁乙丙日記』巻3。

<sup>46</sup> A letter by Mgr F X Maresca, Catholic Bishop of Nanking. Prescott Clarke and JS Gregory, Western reports on the Taiping: a selection of documents, pp.37.

締結すると、宣教師の多くは太平天国の非キリスト教的側面に非難を浴びせてヨーロッパ列強の軍事的弾圧を支持した。そこで語られたのは香港で正統なキリスト教を学んだ<sup>こうじんかん</sup>洪仁玕（洪秀全のいとこ）が太平天国の宗教改革に取り組まないといった非難であり、宣教師自身の宗教的不寛容を吐露する内容であった。つまり太平天国がキリスト教から受容した不寛容は、世界を「文明化」という使命を自任していたヨーロッパの近代がその内部にかかえていた負の側面だったのである。

このように太平天国は近代ヨーロッパ文明が内包していた宗教的不寛容に強い影響を受けたが、この特質は太平天国自身に致命的な影響をもたらした。1856年に太平天国では洪秀全と東王楊秀清が対立し、楊秀清一派が殺害される天京事変が発生した。また1857年には石達開が洪秀全らの嫌疑を受け、多くの部下を連れて離脱する事件が発生した。これらの内部分裂は清軍と対峙していた軍事情勢を一変させ、運動そのものの衰退を招いたが、それは太平天国がユダヤ・キリスト教思想から学んだ宗教的不寛容の必然的な帰結であったと考えられる。

### 3 結論および今後の課題

本研究は太平天国運動の特質を移民、民族および宗教という側面から考察し、その中国近代史における影響について分析を加えた。具体的な作業においては収集した檔案史料を整理し、太平軍の足跡を検証する作業に重点を置き、1850年の金田蜂起から1853年の南京占領にいたる太平天国の歴史についてはほぼ全容を解明出来たと考える。

そこで明らかになった第一の特徴は、太平天国の濃厚な宗教性であった。従来中国では太平天国を中国革命の先駆と位置づけ、その宗教性については否定的な見方をすることが多かった。日本の研究においてもその宗教性を正面から取りあげることは少なく、太平天国に対する理解を妨げてきたように思われる。本研究は「近代社会における宗教」という日本と中国の歴史学研究が看過してきたテーマを再認識し、その重要性を訴える内容となったと考えている。

また太平天国の宗教的特質を考えるうえで、忘れてならないのは中国文化の正統性にこだわる客家の復古主義的な傾向とナショナリズムであった。太平天国の不寛容な教義と「滅満興漢」の漢人中心主義は、客家のローカルな愛国主義を通じて相互依存の関係にあり、偶像崇拝者と見なされた満洲人に対する虐殺事件を生み出した。また太平天国の主張は江南の人々が持つ習慣や発想に対する包容力を欠いており、ユダヤ・キリスト教思想の不寛容は虐げられた山郷の民であった太平軍将兵の豊かな都市住民に対する報復的な抑圧政策を後押しする役割さえ果たした。

近代における宗教とナショナリズムの関係とえば、想起されるのは内村鑑三であろう。彼はイエスと日本という「二つのJ」に対する信仰と愛着を表明したが、その実宗教とナショナリズムが相互依存的に結びつくという現象は近現代史において広く見られた。近代国民国家の形成に重要

な役割を果たしたナショナリズムだが、それは宗教的情熱と密接な関係にあり、また反論の余地を許さない排他性を内包するために紛争の原因となるケースが多い。21世紀に生きる我々にとって、この問題点をどのように乗り越えるかは至急の課題であると言えよう。

このように本研究の成果は問題提起に富む内容となったが、14年間におよぶ太平天国の歴史にとっては前半部分を解明したに止まった。当時の中国社会がどのように変容したかについては、今後もケーススタディを通じて分析を深める必要がある。とくに長江中流域の社会変化は従来の研究で手薄な分野であるため、今回の調査で収集した新史料をどのように既刊の史料集と組み合わせ、立体的な歴史像を描くかについては試行錯誤が続くと予想される。当面の課題として、未発表論文を雑誌に掲載すると共に、それらを『太平天国前期史——金田から南京まで』という形で一日も早く著書にまとめ、世に問うことが挙げられる。

なお末筆になったが、本研究はJFE21世紀財団による研究助成「アジア歴史研究助成」の交付を受けた研究成果である。ここに心より感謝する次第である。

#### 【参考文献】

- ① 深沢克己・高山博編『信仰と他者——寛容と不寛容のヨーロッパ宗教社会史』東京大学出版会、2006年。
- ② 崔之清主編『太平天国戦争全史』1、太平軍興、南京大学出版社、2002年
- ③ 簡又文『太平天国全史』香港猛進書屋、1962年。
- ④ 鍾文典『太平天国開国史』広西人民出版社、1992年。
- ⑤ 菊池秀明『清代中国南部の社会変容と太平天国』汲古書院、2008年。
- ⑥ Prescott Clarke and JS Gregory, *Western reports on the Taiping; a selection of documents* (The university press of Hawaii, Honolulu 1982)。
- ⑦ 並木頼壽、村田雄二郎等編『新版・原典中国近代思想史』第1巻、開国と社会変容、岩波書店、2010年2月、菊池秀明による第3章、太平天国の解説部分。





【図 2】長沙攻防戦図(F.O.931 1906 号、National Archives 蔵):太平軍が長沙省城の南側に陣地を構築し、トンネルを掘り進めている。また総兵和春が城壁外に陣取って工事を妨害し、江忠源の楚勇や張国樑の壯勇(投降した天地会軍)が包囲網を形成している様子が窺われる。



【図 3】林二盛の供述書 (F.O.931 1149 号、同上):「長沙賊匪」とは太平軍をさす。工作員である李亜二らが広東の天地会に仁化县で集合し、「湖南長沙へ赴く」ように要請した部分。



【図 4】雷以誠の上奏(咸豐二年十一月二十九日、軍機処檔 087822 号、国立故宮博物院蔵):太平軍が厳しい軍規で進撃先の人々の支持を取り付けて勢力を伸ばし、清軍の掠奪に反発した人々が太平軍に恩義を感じるようになったと指摘した部分



【写真 1・2】 湖南長沙の城壁と天心閣:この一帯で太平軍は地下にトンネルを掘り進め、城壁を爆破しようとしたが、清軍の防禦工作によって作戦は失敗した(2004年 研究代表者撮影)。